

森里海

日本の山(森)という山(森)里という里は
みな海と繋がっています。
森里海を連環する今を描きます。

物語

こいけ・いちぞう
一九四六年京都生まれ。
小池創作所主宰、共著に
『仕事の創造』岩波書店。
『いい工務店との家づくり』
雲母書房など。
写真・菅徹夫

雨乞いと溜池。 おにぎり山と ベーハ小屋。

讃岐は野の国

讃岐は野の国である。讃岐に山がないわけではない。阿波と讃岐を南北に隔てて讃岐山脈がある。この山脈は、東西方向に長く、南北方向に狭い。阿波側から見ると、吉野川を隔てて聳える急峻な山岳であるが、讃岐側から見ると

おだやかな山容である。平野部にも山はある。地理的にビュート(孤立した丘)と呼ばれるおにぎり山があちらこちらにあり、のどかな表情を生んでいる。どの山も緑に覆われている。丸龜から眺める飯ノ山は、讃岐富士と呼ばれて目立つ山であるが、この山は標高四二二メートルしかない

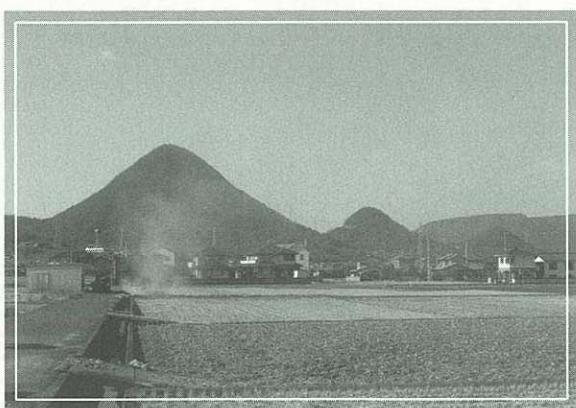
ので、威容を誇るというほどのものではない。

気候は瀬戸内式で、日照時間は全国三位である。雨量は一一六三ミリ(高松市)と少ない。尾鷲あたりの年間四〇〇〇ミリなどに比べるべくもないが、太平洋側の高知市と比べても一六四一ミリも少ない。東から香東川のつくる高松平野、土器川と金倉川の丸龜平野、財田川と高瀬川の三豊

平野などが広がるが、山脈から流下する河川が細いため、三角州の形成は概して弱い。これらの扇状地は、畿内に近いことから、条里制に基づき碁盤目状の道路網や農業用水路網の発達をみていくが、降水量も河川の集水面積も小さいことから、むかしから干ばつ常襲地として水利の苦労が絶えなかつた。

農民は水の確保に血まなこになり、集落間において、あるいは隣近所同士においてさえ、水争いがひんぱんに起つた。時には、竹槍や鎌が持ち出されて、血なまぐさい騒動にも発展した。

日照りが続き、ひび割れた田を前に、せっぱつまつた讃岐の農民は、神仏に雨乞いを念じた。綾南町滝宮神社の念佛踊りは有名で、太鼓、笛、鉦、ぼら貝のはやしに合わせ、「雨・水」と書いた水色の大団扇をひらめかせて、狂ったように踊つた。雨乞いは、毎年夏の盛りの八月二十五日に行われ、境内は夏の陽がカッと照りつけ、玉の汗を浮かべた踊り手によつて行われた。しかし、具体的に水を確保する



田園風景のなか、なだらかな姿を見せるおにぎり山。

上では、溜池が有効だつた。

このため讃岐には、小さな谷をせき止めてつくられた麓池や、台地池、平野部につくられた皿池などの灌漑用の溜池が、年々減少しているとはいえ、今尚、大小一万四六一九池を数える。このおびただしい数の溜池を空から眺めると、点在する溜池が、まるで「緑の瞳」を散りばめたよう

最大にして最古の溜池は、満濃池（貯水量一五四〇万トン）である。一二〇〇年前、大宝年間（七〇一～七〇四年）に造られた。この地の人たちは、それからといふもの當々として一万四〇〇〇余の溜池を造つてきたのである。

讃岐は、傾斜度三%未満の土地の面積構成比が全国平均を大きく上回っているが、それはそのまま、この地で溜池を造ることの難儀を物語つている。

江戸時代から水利利用の仕組みは、讃岐独特のものがある。なかでも「縁香水」や、「走り水」「番水」などは、潜在的な水不足に悩まされた村落共同体の捷とされ、厳格を極めた。

「線香水」とは、線香の燃える長さで水田への配水時間をはかるということをいう。配水台帳によつて、線香の本数・長さが定められ、拍子木を合図に配水が始まり、線香が燃え終わると太鼓で知らせて水を止めたという。

「走り水」とは、田の上を水が走る程度で給水を止める方式をいう。また、配水面積、減水深などを取り決めて配水時間割を実施するのが「番水」制度である。こんな取り決めをしなければ成り立たなかつたのが讃岐の野（里）であ

つた。「水掛け論」「我田引水」などという言葉のリアリティを思い、稻作とは「水」であることを改めて思った。茫洋として広く、満々と水を湛える満濃池の堤防に立つたわたしは、それが人々の苦役によつて人工的につくられた溜池だということが信じられなかつた。讃岐の野の表情は、どこもおだやかであるが、その裏側には、水を巡る凄絶なまでの歴史があつたのである。

讃岐うどん

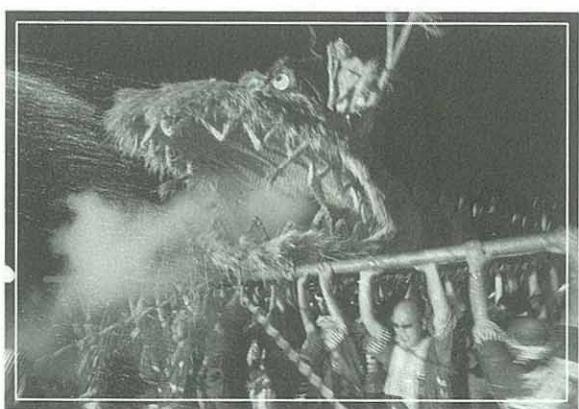
讃岐といえば、讃岐うどんである。今回の案内は、三豊市にある菅組の菅徹夫さんにお願ひしたが、多度津の駅で待ち合わせ、早速案内されたのが讃岐うどんの店だった。讃岐を車で走ると、製麺所という看板が目に入る。わたしはこれまで、うどん屋と製麺所は別ものだと思っていたが、讃岐には、うどんを食べられる製麺所もある。それはちょうど、お豆腐屋が湯豆腐屋を兼ねているようなもので、県外の人間には妙に思えるが、讃岐人にとってはそうめずらしいことではない。

讃岐うどんは、弘法大師が唐から伝えたという話が、お遍路やうどん屋のPRにある。しかし、文献上では認められず定かではない。元禄時代に屏風絵にうどん屋が認められるので、江戸前期からあつたことは確かだろう。

菅さんは、自身のブログ「ShopMasterのひとりごと」で、来る日も来る日も讃岐うどんを追つたことがある。けれども、そこでウンチクが語られたわけではなかつた。ただお店と献立写真を撮り続け、そのことが、唯一讃岐うどんとは何かを見極める方法だと決め込んでいるかのようだつた。この菅さんの手法は、溜池でも、おにぎり山でも、これから述べるベーハ小屋においても共通しているのだが、彼は、そのことによつて対象の本質を見事に炙り出すこと成功した。事物は言葉よりも雄弁であることを示し、それが菅徹夫流のブログ表現であることにおいて、彼は濃密に讃岐の人なのである。

このところ、ベーハ小屋をめぐるブログが元気である。ベーハ小屋とは、煙草の葉の乾燥庫である。在来種は自然

ベーハ小屋に盛り上がる人たち



現在も毎年8月25日に行われる雨乞い祭。



昭和14年の仁尾町雨乞い祭の神事の様子。

とから、ベーハ(米葉)小屋と名づけられた。

ベーハ小屋は農家に付設された乾燥小屋であつて、散在して建てられている。四坪から六坪の小さな建物であるが、平屋建ての農家の屋根から首一つ高く建てられていて、決まつた意匠として越屋根があり、それが一つのアクセントになっている。このベーハ小屋は、今はどこも稼動しておらず、過去の建物であるが、住宅建築を業とする者の目には、何故か気になる存在であった。

菅さんは、気になり出したら対象に真っ直ぐ向かう人である。ベーハ小屋が意識にのぼるようになつたら、それが讃岐に無数にあることが見えてきた。こうなると、もう止まらない。パチリパチリとベーハ小屋を写真に撮り出し、来る日も来る日もブログに載せるようになつた。

菅さんに地元の道楽者も加わって、ベーハ小屋研究会が発足した。道楽とは、道を究めることであるが、それは身が震えるほどにおもしろい「遊び」がなければならない。それを見た島根・柿木村の田村浩一(リンケン)さんが、石見にもあることを自身のブログに載せた。入政建築の新野達治さんも、浜松にあるとブログに載せた。おもしろい「遊び」は時空を超えて飛び交うのがwebである。この動きに欣喜雀躍した菅さんは、田村さんと、新野さんを「特派員」に指名し、いつの間にか二人はベーハ小屋研究会の一員にされてしまった。

四国の阿波葉は、長崎伝来のものに由来するといわれるが、讃岐では、この阿波葉を古くから栽培していた。

明治になって、文明開化の波と共に外国の喫煙様式が持ち込まれた。それまでは、細刻みにしてキセルで吸うタバコしかなかつたが、パイプや葉巻、紙巻両切りタバコが紹介された。

第一次世界大戦後の不況が深刻化するなかで、十本四銭と廉価な「ゴールデンバット」が登場して、刻みタバコから紙巻タバコへの大転換が起こつた。この紙巻タバコの原料に、アメリカから輸入された黄色種が用いられたことから、各地で本格的に栽培されるわけだが、この品種は在来種の栽培と異なつていた。

阿波葉は、多雨冷涼な山地が栽培に適していた。平坦地で栽培すると成長が早すぎて、直ちに生殖成長に移行するため、葉形が狭長となつて葉質が厚くなり、刻みタバコにするには不適だつた。要するに風味を失うのである。

逆に黄色種は、日照を好み、多湿を嫌つた。阿波葉は、阿波(徳島)との国境の山村での栽培が中心だつたが、黄色種は、同じ讃岐でも三豊郡方面が最適地としての条件を有していた。

讃岐とベーハ小屋

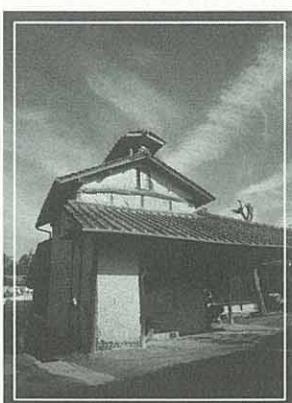
タバコの喫煙は、紀元前、中央アメリカのインディオに始まるといわれる。タバコは、コロンブスにより一五世紀末にヨーロッパに伝えられた。当初、薬草として植えられていたが、やがて嗜好品として広まつた。

東洋への伝播は、ポルトガル、オランダなどによる、いわゆる南蛮貿易と軌を一にしている。江戸前期の元禄時代

には、各地に刻みタバコの銘葉産地が形成されたといふから、驚くべき速さで日本各地に広まつたといつてよい。

「花は霧島、たばこは国分」(ダンチヨネ節)という唄

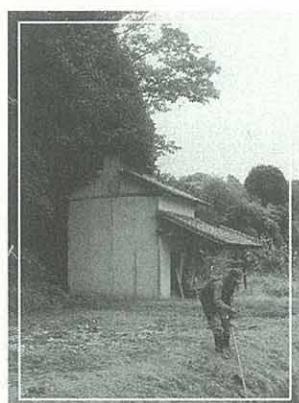
があるが、薩摩の国分葉や指宿葉などは特産品として全国に鳴り響いた。



ベーハ小屋は土壁に越屋根が典型。
三豊市山本町。



土壁を繕うタン、腰板。綾歌郡綾川町。



今は作業小屋に使われているようだ。
三豊市山本町大野。

在来種と黄色種では乾燥法もまつたく異なつてゐた。在来種は天日乾燥が主であつたが、黄色種は乾燥小屋が必要とした。鉄管のなかに火焰を送り、その輻射熱で室内的温度をコントロールし、人工的に加熱するのである。

乾燥小屋は、壁面に土が塗られて窓がない。カビを発生させる湿気の浸入を嫌うからである。越屋根に設けられた、どんぐり返しに回転する天窓が唯一外部に開かれていて、排気口としての機能を持つた。この土壁の壁面と越屋根が全体デザインを決めていて、機能が意匠になつてゐる点で、建築屋はこれに目を奪われる。

讃岐で黄色（ベーハ）種の栽培、乾燥が始まつたのは一九三〇（昭和五）年であったが、以来、急速に普及し、品質においても全国一の折紙がつけられた。専売公社の増産対策に乗つて、讃岐全体で四二四四町歩の栽培面積（昭和四年）を持ち、乾燥小屋は、坂出、觀音寺管内で九三九九ヶ所（昭和四二年）を数えた。溜池ほどではないが、これは驚くべき数である。

素形としてのベーハ小屋

一九九六年に、年間三四八三億本も吸われていたタバコは、人口減少に加え、分煙・禁煙の拡大により、現在、縮小の一途をたどつてゐる。讃岐からタバコ烟は消え、ベーハ小屋は昔日のものとなつた。もう再び戻ることはあるまい。

ベーハ小屋は、歳月に晒され、朽ち、多くは取り壊された。しかし、取り壊されずに残つたベーハ小屋は、目をこらせば、かなり認められる。讃岐に散在するおにぎり山と共に、農家に引つ付いて、あちらこちらに特徴ある姿をとどめているのだ。

それはあたかも、遠いむかしからあつたかのように、讃岐の風景の一つとして馴染んでゐる。今、日本中に、巨大な戦艦を思わせるようなショッピング・センターが郊外に

建てられ、町の商店がシャツターを降ろすなかで、ここだけ地域の「素形」を残したかのように残つてゐる。それは、最近の日本が失つてしまつた「中景」の美しさを保つていて、見るものにつよい感銘を与えるのである。

建築家玉井一匡さんは『小屋の力とその持つ意味』のなかで、

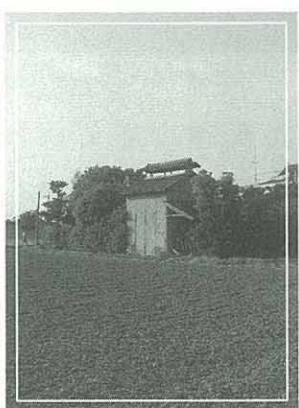
「都市が拡大を続ける時代に住むわれわれには、現実世界の全体を鳥瞰してつかむことがあります難しくなつてゆく。それは自己の位置を確認することができなくなつてゆくことでもある。そのぶんぼくたちは、独立した制御可能な小世界というものの惹かれるのだ。小屋がぼくたちを惹きつけるのは、そういう小さな別世界を視覚化して、ぼくたちの思いをかきたてるからだ」（『小屋の力』ワールドフォトプレス発行）

と言つてゐるが、菅さんたちがベーハ小屋にみようとしたものは、玉井さんが言う「自己の位置」を確かめたいが故であろう。

「なにかが魅力的に感じられるときは、目にとらえられるものの背後に実はもつと大きな豊かなものが潜んでおり、目にはその一部分が見えるにすぎない」（前掲）

ベーハ小屋の背後には、雨乞いの歴史があり、点在する一万四〇〇〇余の溜池を生んだ當為がある。少雨で日照時間が長く、小麦の栽培に適していたことが讃岐うどんを生んだようだ。それはこの時代にそぐわず、不幸な成り行きのものとなつたが、残された建物は、讃岐そのものを表わしている。菅さんに同行して、幾つもの溜池とベーハ小屋を訪ねながら、それらと一つに括れると思つた。

「バラック蒐集家」秋山さんが、各地のバラックにみているものも、建築の土地への馴染みであり、その地域の「素形」であろう。それは建築するものにとつて、汲めども尽きぬ興味をかきたて、建築デザインに創造性を与えるのである。



ぽつと小さな佇まい。
三豊市豊中町。



タマネギの乾燥場に使っている。仲多度郡まんのう町。



JR黒川駅近くの夫婦釜。
奥に土讃線が見える。